

東北の文芸

石川啄木と労働者

スト 晩年の創作に影響

碓田のぼる 著

盛岡市渋民出身の歌人・詩人

石川啄木（1886～1912年）と労働者との関わりに焦点を当てる。26年の生涯で肉体労働者の経験がない啄木だけに意外な視点だが、実は晩年の創作と密接につながっている。

1904～05年の日露戦争で明治ナシヨナリズムに共鳴した啄木が権力への疑義に目覚めたのは、北海道の新聞社に勤めていた08年の初め。小樽での社会主義演説会がきっかけという。労働者は当時厳しい環境に置かれ、保護法の整備が叫ばれていた。啄木は09年、岩手日報の連載で政府の「工場法案」が労働者を軽んじていることを訴え

た。

啄木がさらに衝撃を受けたのが、社会主義者・幸徳秋水らが死刑宣告された10年の「大逆事件」だ。この年の暮れに出た第1歌集「一握の砂」は、収めた551首のうち10年の作品が83%に上り、働く人々の苦境をうたった作品も多い。

11年2月、啄木は不調を訴えて入院。倒れる前の1カ月間は大逆事件に関わる調査、執筆に打ち込んでいた。1月は幸徳らが処刑された月でもある。著者は「命がけの仕事であった」と評する。療養生活に入ったまま12年春死去する。

亡くなる年の1月、病床の啄木は東京市電のストライキを「国民が団結すれば勝つ、多数は力なり」と記した。生きていれば、思想や行動はどんな軌跡を描いたのだろう。著者は長野県出身の歌人、教育評論家。

本の泉社03(5810) 1

580111870H。



2023年7月30日 河北新報